

「だから、恐れるな」 (マタイによる福音書 10:16-33)

先週に続き今週の福音でも、主イエスは弟子たちが派遣されるうえで大切なことを伝えます。主イエスに派遣されるとはどういうことでしょうか。クリスチャンにとって、その出発の出来事として洗礼があります。洗礼式で祈られることの一つひとつが信仰の歩みにおいて重要なことです。洗礼式はすでに洗礼を受けた人にとっても大切なものです。たとえば、受洗の後、共同体は新たに神の家族とされた人を迎え入れ、こう祈ります。

「十字架につけられたキリストへの信仰を告白し、その復活を宣言し、ともにキリストの祭司職にあずかる者となりましょう」

キリストの祭司職とは、キリストがこの世でなさったように、神と人とを繋ぐ役割のことです。ここでは、それぞれが与えられている賜物を用いて、その祭司の務めを果たしていくことができるようにと共同体全体で祈ります。クリスチャンとして主イエスによって派遣されるということは、この祭司の務めをこの世界で果たすために遣わされることなのです。また、これも洗礼式によれば、わたしたちに与えられている務めは非常にシンプルなものです。それは、「十字架につけられたキリストへの信仰を告白すること。そして、その復活を宣言すること」と、洗礼式文に記されている通りです。主イエスによって、主イエスを通して、神の救いはこの世界に、わたしたちにはっきりと示されました。ですから、それ以上に何か特別なことを新たにする必要はありません。すでに主イエスがしてくださったこと、主イエスの言葉、主イエスの死と復活という出来事の内に、神の救いの真実があるのです。それを世界中に宣言すること、これが神と人とを繋ぐ役割を担うように派遣されているわたしたちの務めです。

しかし、その務めを果たすことは簡単なことでしょうか。今日の福音には、弟子は師のように、僕は主人のようになればそれで十分だと言われています。しかし主イエスという師匠と同じようになれるかと問われて、「はい」と答えられる人などいるのでしょうか。家の主人がベルゼブルと言われるなら、その家族はもっと酷く言われることになる、とも言われています。主イエスは神を冒涇した罪で十字架上で殺されました。であれば、その弟子たちはもっと酷く言われる、酷い目に遭うということです。主によって派遣され、なすべきことはシンプルでも、その実際のなんと難しいことか、なんと恐ろしいことかと感じてしまいます。今日の福音ではまさに、派遣されていく弟子たちのその「恐ろしさ」へと主イエスは語りかけています。「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。」と主イエスが言われている通り、狼の群れの中で主イエスにのみ従う羊として生きることは大変困難なことです。狼に襲われる恐怖から逃れるために、人は主イエスよりも他の何かに頼り、自らが狼になってしまうことだってあります。「恐れ」とはそれほどに人が神と共に生きる、主イエスに従って生きる上で、闘わなければならない厄介なものです。主イエスは「恐れ」の厄介さをよくよくご存知だからこそ、弟子たちに今日の箇所を通して励まし、恐れから弟子たちを護られます。その励ましのなかで繰り返されるのが、「恐れるな」という言葉です。では、何を恐れるな、と主イエスは言われるのでしょうか。

主イエスはまず、「人々を恐れてはならない」と言われます。なぜなら、「体を殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。」と続けて言われている通り、人は魂をまでも葬ることは出来ないからです。人は主イエスを十字架によって殺しました。しかし、その魂までも葬ることは出来ませんでした。そして、神はその主イエスを復活させたのです。「魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」と言われる通り、それができるのは神だけなのです。だか

らこそ、いかなる迫害も恐れることはない」と主イエスは弟子たちに告げます。人を創造し、主イエスを復活させた神だけが、魂をも滅ぼすことも救うこともできるからです。

そして、驚くべき福音が続けて語られます。そのすべての命を支配する神が、わたしたちの髪の毛一本までも数えてくださっているというのです。わたしは自分の髪の毛の数を知りません。神がわたし以上にわたしのことを知ってくださっている、ということです。「二羽の雀が一アサリオンで売られているのではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ地に落ちることはない。」一羽の雀の死であっても、神は放っておくことはない。その眼差しが失われることはない。ならば主は、わたしたちのことを決して放っておくことはない。今も未来も、死してなお、命を支配される神がわたしたちを見捨てることはない。「恐れるな」という主イエスの言葉は、この神への信頼ゆえの言葉です。この神が共におられるからこそ、あなたがたは恐れることはない、と主イエスは力強く弟子たちを励ますのです。

先日、東京諸聖徒教会の聖画の数々を描かれた郡山正さんが106歳で亡くなりました。ご葬儀では郡山正さんの愛唱聖歌「神は愛なり」を歌いました。神は愛なり、ということ、今日の福音からもはっきり感じます。神はわたしたちの髪の毛一本までも数え、愛し抜いてくださるのです。一羽では売り物にもならない雀の命をも見守られる神は、例外なくわたしたちすべての命を慈しみ、大切にしてくくださるのです。わたしたちが教会に集うのは、この神の愛をいただくためです。わたしたちの髪の毛一本をも見つめ、死をも超えて愛し抜いてくださる神の愛。わたしたちはみ言葉によって、この交わりにおいて、まさにその神の愛をいただきます。今日の旧約聖書でエレミヤが神に自らを明け渡したように、その神の愛にわたしたちも自らを明け渡すなら、わたしたちはあらゆる恐れから解放されるのです。その愛をいただくなら、死をも支配される神が常に伴い、護り、導いてくださるからです。そして、わたしたちはその愛によって神に護られ、導かれるからこそ、狼の群れの中を主イエスに従う羊として生きることができるのです。

しかし、それでも、師である主イエスのように生きることには困難が伴うでしょう。恐れはそれほど強いからです。そのような時こそ、祈るということに立ち帰らなければなりません。なぜなら、「わたしが暗闇で言うことを明るみで言いなさい。耳打ちされたことを屋根の上で言い広めなさい」とある通り、暗闇で祈る時、神が語りかけてくださるからです。ゲッセマネの園で、暗闇のなか祈る主イエスを想像しましょう。囚われる前、主イエスは暗闇のなか、恐れの中かで額から血のような汗を流しながら祈りました。そして神の言葉を聞き、御心に自らを明け渡しました。師のようになれば良いと言われる主は、わたしたちも困難のなかで祈りなさいと言われていたのです。恐れに囚われるなかでも祈るなら、神は語りかけてくださるのです。ゲッセマネで主イエスに語られた神がわたしたちにも語られる。祈りの中で真実の声が聞こえる。その言葉に自らを開き、従って歩むこと。主イエスは恐れの中かで歩むべき道を照らしてくださっています。

わたしたちはそれぞれ違う賜物が与えられています。違う言葉、違う方法で良いのです。大切なことは、「恐れるな」と言われる主の言葉を祈りのなかで聞き、死ぬまで、いや死してなお伴ってくださる神の愛をいただくことです。魂を滅ぼすことも、救うことができるのもこの神だけです。一人でも多くの人が、真の命をもたらず神を信じ、恐れではなく、愛を全身に感じて生きることができますように。そのために、今日も神の愛を受け、派遣されていきましょう。